

20世紀ドイツのピアニスト、ヴィルヘルム・ケンプがにわかに注目されている。50～60年前の日本でのライブ録音が相次いで見つかり、ケンプと戦後日本の深い絆が明らかになった。

「あの演奏は忘れられない。『月光』（ベートーベン）が始まった途端、壁の穴を穿て隠した粗末なステイジが、天国に変わったのです。『ウルトラセブン』の音楽や『帰ってきたウルトラマン』の『ワンダバコラス』などで知られる作曲家の冬木透氏は懐かしそうに語る。

広島で演奏会

ケンプは1954年、まだ原爆の傷痕が残る広島市を訪れ、冬木氏が通っていたエリザベト音楽短期大学（現在は音楽大学）の講堂で演奏会を開いた。さらに後日、米国やドイツなどからの寄付で完成した教会、世界平和記念聖堂のオルガンでバッハを弾き、録音した。冬木氏はこの録音も手

ケンプと日本 深い絆

50～60年前の訪日時の録音発掘



ピアノに向かうケンプ（Uebrecht / アフロ）

伝ったが、緊張でゴチゴチの冬木氏の手をにぎやかに握りしめるなど、ケンプの温かい人柄に触れたという。「人格の素晴らしさが、そのまま演奏に表れている人」と冬木氏は話す。

この史実はしかし、徐々に振り返られなくなった。日本の経済成長と共にクラシックファンの間では「超絶技巧」がもてはやされ、技術をひけらかすタイプではないケンプは、人気奏者の中心からはずれたのだ。

ところが今年、当時の録音が相次いで発見された。まず広島での演奏と同じ54



ケンプのレコードを手にする冬木氏（写真上）と三好氏が見つけた「HIROSHIMA」のレコード



年に東京で弾いた「皇帝」（ベートーベン）の一部がTBSで、続く61年の来日時に東京で行ったベートーベンのピアノソナタ32曲全曲演奏のライブ録音もNHKで発掘され、ともにCDがリリースされた。

54年のオルガンでのバッハ演奏のレコード「HIROSHIMA」を数年前に入手した広島市職員の三好史久氏は、ケンプと地元との関係を調べている。

被爆者に寄付

三好氏によれば、ケンプはオルガン演奏の謝礼や

ヴィルヘルム・ケンプ（1895～1991）ドイツ・フランクフルト州生まれ。父は教会オルガニスト。ベートーベンの演奏には特に定評があり、バッハやシューベルト、シューマンも得意とした。36年に初来日。第2次大戦後はナチスとの関係を疑われた時期もあった。79年まで計10回来日した。

「HIROSHIMA」の売り上げを被爆者のために寄付。その後も寄付は続いた。加えて、原爆孤児のいる児童施設にも定期的に送金していたことが分かった。「これほど広島のため

に尽くしてくれていたとは」と三好氏は驚く。「HIROSHIMA」にはケンプの平和を願うスピーチも録音されている。2度の大戦に自らも翻弄されたケンプにとって、戦災は人ごとでなかったのだろう。

三好氏は、欧州で活躍した音楽家、貴志康一がベルリンでケンプと友人関係にあったことを示す文章も見つけ「早くから日本人を知り、感性も合うと感じていた」とも推測している。冬木氏も「ケンプがラジオで紀實之を引用するのを聞いたことがある。日本文化に通じていた」と証言する。

61年のソナタ全曲を収めたCDは特に反響が大きかったという。担当したキングインターナショナルの宮山幸久氏は「ケンプは、日本人が最も愛したピアニストなのではないか」と考える。

調べるほど、作家や女優、一般の人など幅広い人々がケンプに親しんだことが分かるからだ。

冬木氏はケンプから「音

楽は、深いものを表現する芸術だ」と教えられたと感じている。そんな冬木氏の音楽もまた、現代の特撮ファン、音楽ファンに深く愛

されている。だとすればケンプの精神は「ウルトラセブン」を経て現代にも伝わっているのかもしれない。（文化部 瀬崎久見子）